

10年後、どこで・誰と・ どのように暮らしますか

濱 恵介

Written by Keisuke Hama

近未来の理想的な 住まい・暮らし方を探る

住まいは家族・個人の歴史を反映している。親の代、あるいはそれ以前からの経緯にはじまり、様々な必然性や制約、願望、そして偶然が絡みあつた結果である。希望どおりのこともあるし、妥協し我慢している場合もある。これまでの住まい・暮らしを踏まえ、近い将来に望ましい居住地や暮らし方があるとすれば、それはどのようなものであろうか。

今回実施した「生活意識調査」の一環として、一〇年後の理想的な居住地と暮らしのイメージを聞いてみた。一〇年の意味は、現実からある程度解放され、目的に向かって準備の時間も確保できるという期間である。質問は、どんなところに住みたいですか、どんな暮らし方をしたいですか、誰と一緒に暮らしますか、の三つである。選択肢から選ぶ方式を基本とし、自由記入欄を設けた。

どんなところに住みたいか

想定した選択肢は以下の七種である。(1)都心に近く便利で賑やかな市街地、(2)最近開発された新しい郊外住宅地、(3)古くからある伝統的な街・都市、(4)職・住・商混在の下町風の街、(5)緑が多く落ち着いた住宅地、(6)田

畑や森などが豊かな里山、農山村、(7)海や山など自然が近いリゾート地。

最も希望が多いのは、意外とおとなしい選択肢だった。「緑の多い落ち着いた住宅地」である。「そう思う」「二・三パーセント」とどちらかといえば「そう思う」「四六九パーセント」を合わせて七割近い人がこれを希望し、二位以下を大きく引き離している。

戸建て・集合の建て方区分は聞いていないので、住宅地の姿には多様な可能性があるが、緑・落ち着きという要素が幅広い支持を受けているものと見られる。また、他の選択肢とあわせて、望まれる要素ともいえる。

次に多かったのが、「田畑や森などが豊かな里山・農山村」と、都心に近く便利で賑やかな市街地であった。前者は田園指向、後者は都心指向と両極を代表するかのようである。それぞれ「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が九・七＋二・三＝一五パーセント、九・一＋二・〇＝一一パーセントであわせて二六パーセント前後の肯定的回答があった。

田園指向は、現状を肯定するかたちか町村部で比較的多いが、都市部でもかなりの支持を集めている。年齢層としては中高年層を中心に「現代風の田舎暮らし」への憧憬ないし潜在的願望があると見られる。

一方、都心指向は、都市部での支持が多いのは当然として、町村部でも二割程度の人が支持している。都市部の田園指向と町村部の都心指向は、それぞれ今の居住とは別なものへの願望を反映しているのだろう。

次に多い回答としては、「海や山など自然が近いリゾート地」「古くからある伝統的な街・都市」「職・住・商が混在した下町風の街」の三つがくる。それぞれ「そう思う」が五パーセント前後、「どちらかといえばそう思う」が二〇パーセント前後である。いずれも個人的な住まい方が考えられ、少数派ながら条件がそろえば実現したい選択肢として支持を受けている。

これらに対し、最も人気がなかったのが、最近開発された新しい郊外住宅地だ。成熟に向かおうとする都市の状況には当然の傾向であろう。あるいは、新規開発が遠隔地と不便さを連想させたがもしれない。

その他の欄には、「海外」という記述が見られた。

どのような暮らしを望むか

次に暮らし方の希望を聞いた。選択肢は以下の二二項目である。(1)安定した収入の確保、(2)家族との団欒を大切に、(3)趣味・楽しみを中心、(4)都会的でおしゃれ、(5)何ごとにも便利で快適、(6)誰にも気兼ねない一人での暮らし、(7)仕事・遊び・家庭のバランス、(8)仕事ややはり第一で、ゆとりがあればその他も楽しむ、(9)森や畑に親しみ自給自足に近い、(10)自然の摂理に逆らわず環境を大切に、(11)質素で浪費しない、(12)気楽な来客がたくさん。

その結果、「収入確保」と「家族団欒」が圧倒的な支持を得た。ともに「そう思う」が約五〇

総数
(n=1034)

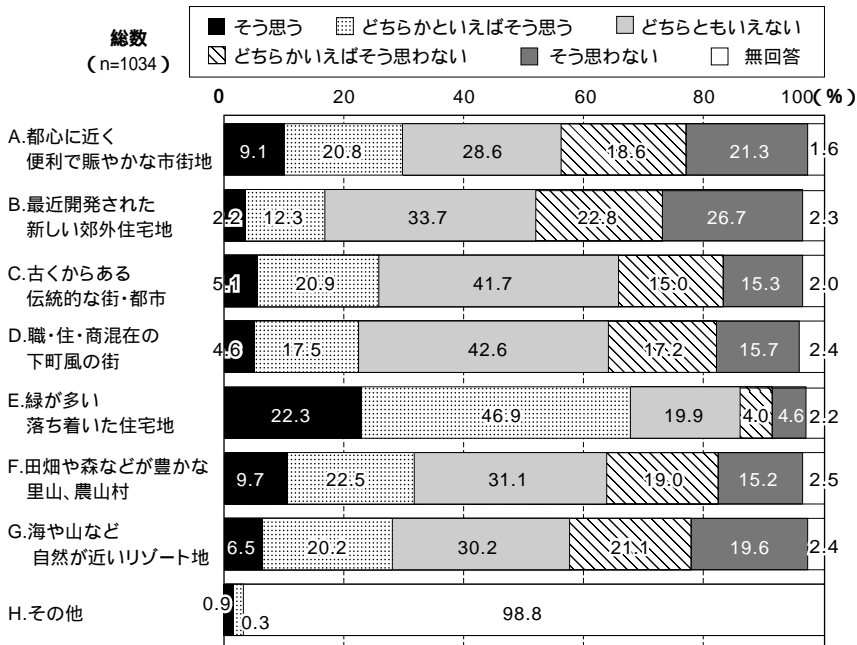


図1 どんどころに住みたいですか

その次に支持率の高かった選択肢が「便利で快適」と「自然の摂理・環境」という対照的な内容である。「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」がそれぞれ一五・九 + 三三・八パーセント、一〇・八 + 三三・五パーセントだった。約半数ずつがどちらかを指向しているというようにも見えるが、両方について「そう思う」と答えた人が約四パーセント、両方または片方を「どちらかといえばそう思う」と答えた人が約二〇パーセントいた。「便利さも環境も大事」と考えている状況がうかがわれる。

一方、少数派ながら、「質素で浪費しない暮らし」「森や畑に親しみ、自給自足に近い暮らし」を「そう思う」と答えた人が、それぞれ六・九、五・五パーセント、どちらかといえば二二・八、一七・〇パーセントにある。工業社会の大量消費型生活から脱却したいと思う生活者が五〜七パーセント、共感を抱く人を含めると三割近くいることを示している。なお、両方をともに「そう思う」を選択した人は約三パーセントである。

「都会的でおしゃれな暮らし」は意外にも支持が少ない(七・三 + 一五・六パーセント)。いわば先端的流行に乗った暮らし方は、商業的イメー

誰と暮らすか

ジとしてもてはやされるが、全体的な指向を代
表するものでは決していないようだ。
最も少なかったのが、「誰にも気兼ねのない一
人暮らし」指向であった。「そう思う」が四・六八
一セント、「どちらかといえば」を含め約一五パ
ーセントにとどまった。「誰と暮らしますか」の
質問と重ね合わせると、「気兼ねのなさ」は希
望するが、本当に一人暮らしが良いと思ってい
る人はその半数程度と推定される。

住む場所と暮らし方の前提となる必須要素
として、「誰と一緒に暮らすのか」を質問した。
選択肢として以下の八種を準備した。(1)一
人だけで、(2)配偶者と二人で、(3)配偶者、
子ども(達)と、(4)気の合った仲間と、(5)親
と、(6)親、配偶者と、(7)親、配偶者、子ども
(達)と、(8)すべて。

最も多い回答は、「配偶者や子ども(達)と一
緒」で、「そう思う」が三五・二パーセント、「どち
らかといえばそう思う」が三〇・八パーセントと、
ほぼ三人に二人が肯定的に答え、二〇〜三〇代
では八割近くに上る。夫婦・親子関係が家族の基
本形であることは時代を超えて変わりはない。

子どもとは同居せず、「配偶者と一緒」を希
望する人も半数近く(二二・一 + 二六・六パーセ
ント)あるが、その意味は年代によって異なる。
若い世代が配偶者のみと暮らすことは、結婚し

ても子どもがいなければつくりにくいことを意味す
るから、二〇・三〇歳代の三〇〜四〇パーセント
が肯定していることは少子化傾向を裏付ける
ようである。
一方、子育てを終えた六〇歳代では、女性よ
り男性の方が配偶者との同居を望む率が明ら
かに高い。女性が一人で暮らすことに自信を持
っているのに対し、高齢の夫が妻を頼りにしてい
ることを示しているようだ。

血縁によらず、「気の合った仲間と暮らす」を
選んだ人は、約一五パーセント(三・四 + 一・四
パーセント)。絶対数は少ないものの、年代・地域
性に偏らない支持を受けている。これには法的
な婚姻でない同棲も含まれると見られる。
一人だけで暮らすことを肯定する人も約九
パーセント(三・八 + 五・〇パーセント)いた。若い
男性および中高年女性にやや傾向が強い。年齢
層による暮らし方のイメージは違っただろうが、

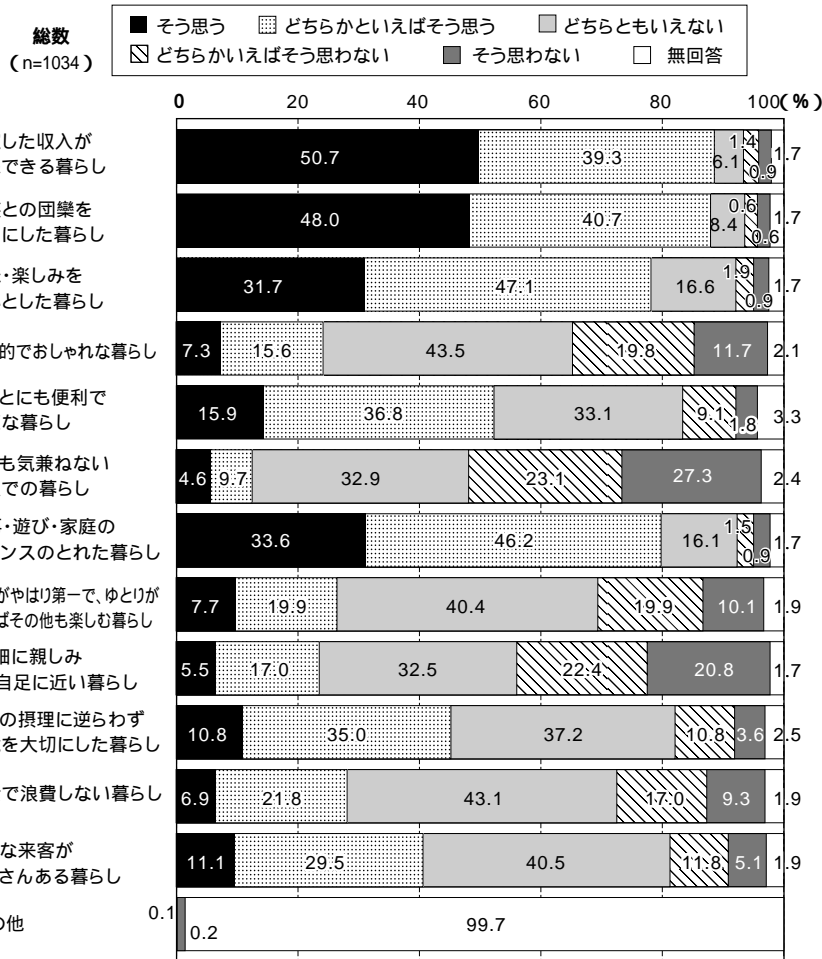


図2 どんな暮らし方をしたいですか

重要な人生の選択肢である。ただし、調査対象のうち単身者は三・四パーセントと、全国平均に較べはるかに低いので、比率・数はあまり意味を持たない。

「ペットと暮らす」ことは、三割近くの人が希望している。これは、人と同居しないで」と条件付けてはいないので、単身でペットと暮らしたいわけではない。ペットだけと暮らしたい人は、一人暮らし希望の少なさを反映しわずかである。

それぞれの夢がかなう「住」の姿

さて、これらの調査結果を踏まえ、個人的な解釈を交えながら今後の「住」の姿を探ってみよう。

理想の居住地・暮らし方への回答は、単なる空想ではなく、実現したい夢を語ってくれたものと思われる。調査結果を考え合わせてみると、近未来における住まい・生活の夢は、基本的な共通点と個別的な夢や指向の組み合わせであると思われる。

共通項としては、ある程度の所得や資産、家族や友人との良い関係、緑の豊かな暮らしやすい環境など、大多数の支持を得た内容がそれらに当たる。

一方、個性は、一緒に暮らす相手、最も重視する環境要素、お金・時間など手持ちの資源の利用優先順位、生き甲斐などであろう。結果として、基本的な条件が充足された上で、それぞれの思い描く居住地・家族像・生活像を追

求するわけである。

今のままで良いとする人が多いことは当然だが、いったん都市郊外に定住したが改めて都心を目指す人がいる。その一方で、都市を離れ、里山・農村を望む人がいる。都心指向でもモダンな高層居住を当然とする人も、伝統的な居住様式を指向する人もいる。

暮らし方では、都市型の「便利・快適」だけでなく、「農」に根ざした田舎暮らしや、贅沢を遠ざけて清貧を良しとする生き方、趣味・レジャーに生き甲斐を求める方向もある。さらにはいくつかの夢を同時に実現したい人もいるだろう。数はまだ多いとはいえない

が、個性的な暮らし方を求める人が増える予感がする。現時点の少数派が、これから拡大してゆくかどうかを見極めるには、継続的な観測が必要となる。

楽観的に見れば、住む場所・暮らし方を選択できる贅沢を我々は手にしたのかもしれない。その一方で、夢を描くどころか、最低限の居住・生活という幸せに生きるための基本条件さえも確保できない人々がいる現実も忘れてはならない。

不公平の拡大が社会問題となり、住宅政策も市場原理に委ねる方向にある中で

生活者それぞれが希望する居住の実現に必要な条件や有効な支援策を明らかにすることの重要性は、むしろ高まっている。

最低水準を保証すると同時に、各人の理想がかなう条件は単純ではない。仮に住まいの夢が経済的に実現可能となっても、それが持続可能か、環境容量の範囲内か、等の検証が必要である。いずれにせよ、「住」の充足が安定した社会の必要条件であることに議論の余地はなく、これは個人と行政・企業等の関係セクターが常にその実現に努めるべき課題である。

大阪ガスエネルギー文化研究所 研究主幹

CEL

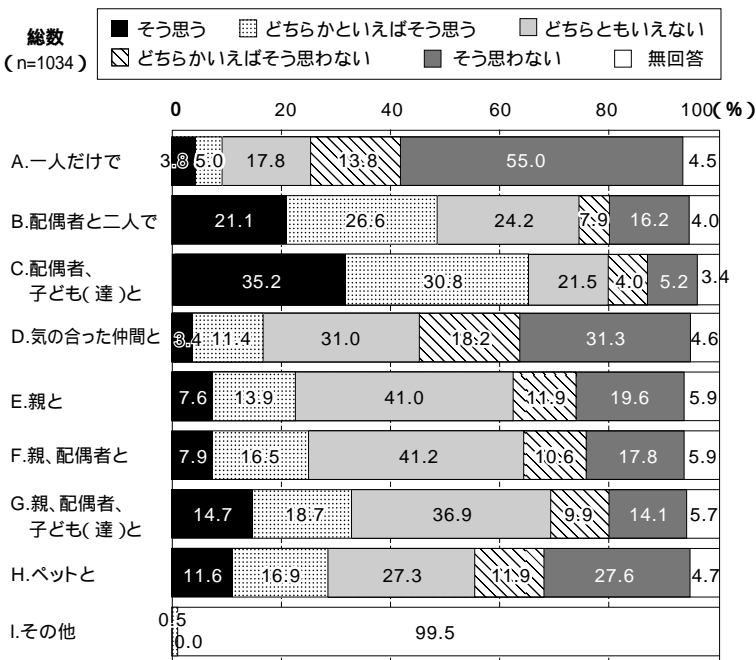


図3 誰と一緒に暮らしますか